

中学校第2学年

(2) 社会

分析結果の表記について

「小問ごとのねらいと正答率」の評価の欄の については、県正答率と予想正答率との差を記号化して示している。

- 1 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上高いもの.....
- 2 県正答率が予想正答率よりも5ポイント以上低いもの.....
- 3 1と2の間にあるもの

「小問ごとのねらいと正答率」の比較の欄の「H15」「全国」については、過去の基礎学力調査問題や全国教育課程実施状況調査問題と同一問題、類似問題であることを示している。

- 1 H15 ~ 平成15年度基礎学力調査問題と同一または類似問題
- 2 全国 ~ 平成13年度全国教育課程実施状況調査問題と同一または類似問題
正答率と誤答率は、抽出調査した全人数に対する割合を表している。

誤答例については、抽出調査した中で、割合の高かったものを中心に記載している。

(2) 社会

調査問題の構成とねらい

- ・ 社会科の理解力・思考力・判断力に関する基礎的・基本的な知識や能力をみる問題とした。
- ・ 写真や地図、グラフ、図などの、様々な資料活用能力をみたり、記述式の問題を取り入れたりして、生徒の多様な考え方や態度、表現力をみる問題とした。
- ・ 日常生活にみられる身近な題材を取り上げ、社会科に関する興味・関心がもてる問題とした。

平均点 60.0点

小問ごとのねらいと正答率

大問	分野	小問	内容・ねらい	観点	大問別 正答率	小問別 正答率	予想 正答率	評価	比較
1	世界の 地域	問1	ユーラシア大陸を知っている。	知識	61.5	81.9	75		
		問2	各大陸のおおよその形状を資料から判断できる。	資料		53.5	80		
		問3	日本と同緯度にある国を地図上で判断できる。	資料		54.5	60		
		問4	目的別の地図の特徴を理解している。	知識		69.7	80		
		問5	時差の計算ができる。	知識		48.1	50		H15
2	日本の 地域	問1	領土、領海、領空を理解している。	知識	67.3	39.1	55		
		問2	日本との関連でオーストラリアの特徴を知っている。	知識		79.1	70		
		問3	日本の周辺部の国と海洋を知っている。	知識		70.4	70		
		問4	日本の7地方区分を知っている。	知識		65.6	75		
		問5	日本の各地方の気候を大観することができる。	資料		82.5	80		H15
3	身近な 地域	問1	地形図の読み取りができる。	資料	68.0	40.3	60		
		問2	地形図の2地点間の距離を計算できる。	知識		44.7	60		H15
		問3	地形図の地図記号から調査テーマを考えることができる。	思考		93.7	70		
		問4	調査活動の留意点を考えることができる。	思考		93.4	65		
4	都道府 県	問1	資料からピーマンの生産の特徴を読み取ることができる。	思考	58.0	53.0	60		全国
		問2	資料から適切な表現方法を判断できる。	思考		57.2	60		全国
		問3	宮崎県のピーマン栽培の特徴を理解している。	知識		63.7	60		H15
5	古代の 日本	問1	打製石器の特徴を知っている。	知識	75.1	74.2	65		
		問2	写真から縄文土器が分かる。	資料		74.2	70		
		問3	中国の歴史書に記された日本の様子を理解している。	知識		60.0	70		
		問4	弥生時代に稲作が普及したことを知っている。	知識		58.4	70		
		問5	渡来人を知っている。	知識		89.2	65		
		問6	前方後円墳の形状をえがくことができる。	資料		94.6	85		
6	中世の 日本	問1	日本で最初の律令の内容を判断できる。	思考	59.3	51.1	60		
		問2	平城京を知っている。	知識		48.8	70		
		問3	かな文字を知っている。	知識		72.2	65		
		問4	鎌倉幕府の地図上の位置を知っている。	知識		63.5	70		
		問5	古代から中世までの時代を概観できる。	資料		61.0	70		
7	近世の 日本	問1	豊臣秀吉の功績を知っている。	知識	56.2	58.3	60		
		問2	武家諸法度を資料から判断できる。	資料		60.2	70		
		問3	キリスト教弾圧が資料から読み取ることができる。	資料		70.7	60		
		問4	元禄文化の特徴を理解している。	知識		35.6	50		H15
		問5	徳川吉宗の享保の改革を知っている	知識		56.1	50		
8	近代の 日本	問1	日米和親条約を資料から判断できる。	資料	71.9	74.6	65		
		問2	アメリカの南北戦争を知っている。	知識		65.6	60		
		問3	地租改正を理解している。	知識		71.9	60		全国
		問4	伊藤博文の功績を知っている。	知識		74.8	65		
		問5	産業革命を知っている。	知識		72.4	70		

思考(思考・判断), 資料(資料活用の技能・表現), 知識(知識・理解)

1 正答率 (61.5%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	ユーラシア大陸	81.9		ヨーロッパ(3.0) アジア(2.2)
2	エ	53.5		イ(16.8) ア(7.2)
3	イ	54.5		ア(12.6) ウ(4.4)
4	エ	69.7		ア(9.6) ウ(8.0)
5	8時間	48.1	H15 43.0 類似	9時間(16.4) 無解答(7.8)

< 考察 >

世界の地域構成に関して、地図を通して地球上の位置関係や、世界の国々の構成と地域区分について問う問題である。

問2は、地図上で、アフリカ大陸の形状を判断する基礎的・基本的な内容であり、問3は、地図を活用して日本と同緯度の国を選択するものであるが、いずれも正答率が低い。問5は、昨年度との類似問題である。正答率は伸びているが、昨年度と同様に40%台の低い正答率である。緯度や経度、時差に関する基礎的・基本的な内容が十分に身に付いていないことが分かる。

そこで、指導に当たっては、大陸のおおまかな地図をかかせたり、教科書にある緯度や経度の問題を利用したりするなど、繰り返し指導する必要がある。また、地図や地球儀を活用した学習を進めることで、地図の読み取りに慣れさせるとともに、時事的な内容とも関連させて地図を用い、生徒の興味・関心を高める工夫を授業の中で行うことが大切である。

2 正答率 (67.3%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	ウ	39.1		エ(27.4)
2	オーストラリア	79.1		中国(1.6) ロシア(1.6) 無解答(1.8)
3	エ	70.4		ウ(16.0) イ(5.0)
4	イ	65.6		ア(12.6) エ(6.0)
5	ア	82.5	H15 92.3 類似	イ(5.0) エ(3.8)

< 考察 >

日本の地域構成に関して、日本の位置や領域及び都道府県の構成・地域区分について問う問題である。

問1は、国土の領域の特色を広い視野から判断する問題である。正答率が低く、「領海を200海里」とする選択肢エの誤答が、27.4%と高い。領土・領海、経済水域などに関する基礎的・基本的な知識が不十分であることが分かる。問5は、昨年度との比較問題である。正答率は82.5%と高いが、那覇市の気候グラフを選択させた昨年度の92.3%と比較すると、正答率は下がっている。寒冷地である札幌市の気候の特色に関する理解が、やや不足していたことが原因と思われる。

そこで、指導に当たっては、我が国の位置と領域の特色を、地球儀や地図を活用して多面的・多角的にとらえさせ、地図帳を使って説明させたり、模式図をかかせたりする必要がある。また、我が国と近隣の国々との領域をめぐる具体的な問題点にもふれるなどして、日本の地域構成に関して興味・関心を高めることが大切である。

3 正答率 (68.0%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	ウ	40.3		エ (21.4) イ (14.0)
2	500m	44.7	H15 45.0 類似	50000m (6.0) 5000m (3.4) 無解答 (5.2)
3	イ	93.7		
4	A	94.8	93.4	
	B	92.0		

< 考察 >

身近な地域について観察や調査などを行う学習活動において、その地域的特色をとらえるための地形図の読み取り、調査活動の手順や視点、方法について問う問題である。

問1と問2は、昨年度と同様に40%台の低い正答率である。地形図における地図記号及び方位、土地利用などの知識・理解と、それらを基に地形図を読み取る力や、縮尺に関する理解が不十分である。調査活動の手順や視点、方法について出題した問3と問4は、正答率が高く、調査活動に関する理解が十分に定着していることが分かる。

そこで、指導に当たっては、地形図の読み取りにおいて、実際の地域調査によって、地形図も活用しながら確認させた上で、地形図から関心のある地理的事象を発見させたり、地域的特色をとらえさせたりするなどの活用の技能を高める指導を取り入れることが大切である。また、身近な地域の調査活動を行う際に、地形図の他に、その他の統計資料にも多くふれさせることが大切である。

4 正答率 (58.0%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	エ	53.0	全国 48.6 同一	ウ (13.8) ア (7.8)
2	グラフ	63.1	全国 48.5 同一	ア (18.0) イ (3.4)
	理由	51.3		ア (14.6) ウ (8.2)
3	冬の温暖な気候、ビニールハウスで栽培	63.7	H15 67.8 類似	気候のみの記述 (7.0) 無解答 (9.0)

< 考察 >

農産物の生産について、統計資料や主題図から都道府県規模の地域的特色を判断する力や、統計資料を適切なグラフに表す力が身に付いているかをみる問題である。

問1と問2は、平成13年度教育課程実施状況調査との比較問題である。全国の前正答率は、問1が48.6%、問2が48.5%であり、いずれも本県の正答率が上回る結果であった。様々なグラフを読み取ったり、統計資料をグラフに表したりする学習指導の充実が図られていることが分かる。問3は、昨年度との比較問題である。本県特産の農産物名を答えさせた昨年度に対して、生産量が多い理由を説明させる問題に変更したことによって、正答率が下がったものと思われる。

そこで、指導に当たっては、地図の読み取りや作図、グラフなどの統計資料の読み取りや主題図の作成などの作業的な学習を取り入れ、それらを発表する機会を設けていくことが大切である。

5 正答率 (75.1%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	誤答例(%)
1	打製石器	74.2	石器(2.4) 磨製石器(1.8) 無解答(4.8)
2	イ	74.2	ウ(8.4) ア(4.8)
3	イ	60.0	ア(15.8) 工(5.2)
4	稲作	58.4	土器(2.8) 無解答(8.6)
5	渡来人	89.2	
6	省略	94.6	

<考察>

古代における人々の生活の変化を、土器の使用や稲作・金属器の伝来など、大陸との関係から問う問題である。

問4は、無解答や同単元の関連事項に関する他の語句を答えている誤答がみられる。大陸から伝来した稲作によって大きく変化した時期の日本社会についての理解が不十分であることが分かる。問5は、語句を記述する問題の中では最も正答率が高く、基礎的・基本的な内容の定着のための指導が確実に行なわれていることが分かる。問6は、前方後円墳の形状をえがく問題であり、高い正答率となった。生徒の考古学への興味・関心の高さがうかがえる。

そこで、指導に当たっては、博物館や郷土資料館の利用、各種の資料を適宜活用するとともに、中国などの世界の古代文明との関連を重視したり、新たに発掘された遺跡や遺物などの考古学上の成果を取り入れたりして、歴史学習における最初の単元の学習に当たって、生徒の興味・関心を高める工夫が必要である。また、古代における人々の生活の変化や特色をまとめた一覧表を生徒に作成させるなどの作業的な学習を取り入れることも大切である。

6 正答率 (59.3%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	誤答例(%)
1	ア	51.1	イ(26.8) ウ(7.6)
2	平城京	48.8	平安京(24.6) 無解答(7.4)
3	かな文字	72.2	甲骨文字(3.6) 無解答(7.8)
4	イ	63.5	ウ(20.8)
5	工	61.0	ウ(15.4) イ(6.8)

<考察>

古代から中世までの国家が形成されていく過程のあらまし、大陸から取り入れた文物や制度、日本独自の文化について問う問題である。

問1は、我が国が最初に取り入れた大陸の制度に関する問題で、正答率は低い。問2は、国際的な要素をもった文化が、都を中心に栄えた歴史的な事象についての基礎的・基本的な問題である。正答率が48.8%と低く、奈良の都を「平安京」とする誤答が24.6%もあったことから、基礎的・基本的な内容の定着が不十分であることがわかる。問4は、鎌倉幕府の地図上の位置を問う問題である。また、問5は、元寇の時期を判断するもので、いずれも歴史的分野の基礎的・基本的な内容であるにもかかわらず、その定着は、正答率から判断すると十分とは言えない。

そこで、指導に当たっては、各時代の特色をとらえさせる際に、その時代の個別の事象だけを取り上げて指導するのではなく、前後の時代と比較させるなどして、歴史の流れを大きくつかませることが大切である。また、歴史的分野の授業において、随時、地図の活用を図り、地理的分野と関連付ける指導の工夫も大切である。

7 正答率 (56.2%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	豊臣秀吉	58.3		徳川家康(10.2) 織田信長(8.2)
2	工	60.2		ア(14.0) ウ(4.2)
3	キリスト教の信者を見つけ出すため	70.7		無解答(12.4)
4	イ	35.6	H15 33.6 類似	ア(16.2) ウ(14.8)
5	享保の改革	56.1		天保の改革(5.6) 寛政の改革(4.4) 無解答(15.6)

< 考察 >

近世社会の成立とその変化を、代表的な歴史上の人物及び制度、文化などを中心にとらえさせ、近世社会の全般について問う問題である。

問1は、重要な人物であるが、正答率は低い。問3の正答率は高いが、無解答も多く、資料から読み取れることを適切に表現する力が不足している。問4では、元禄文化と化政文化を混同していると思われ、昨年度と同様、正答率が低い結果となった。それぞれの文化の特色の理解が不十分であることが分かる。特定の時代の学習内容を、他の時代のものや類似している内容と混同している箇所があると思われる。

そこで、指導に当たっては、小学校の歴史学習との関連を重視し、各人物に関する内容をまとめさせ、発表の機会を設けることが大切である。また、歴史的事象に、年号が使われている例を確認させるとともに、それぞれの時代の政治や文化を代表する写真や絵、文章などの歴史資料を活用し、多面的・多角的に考えさせる場を設ける必要がある。

8 正答率 (71.9%)

問題番号	標準解答	正答率(%)	比較(%)	誤答例(%)
1	日米和親条約	74.6		日米修好通商条約(9.0) 無解答(5.2)
2	ウ	65.6		ア(14.0) イ(3.6)
3	工	71.9	全国 60.1 類似	ア(7.0) ウ(7.0)
4	伊藤博文	74.8		板垣退助(1.6) 無解答(9.6)
5	産業革命	72.4		産業改革(5.8) 無解答(14.2)

< 考察 >

日本が立憲国家として近代化を進めていく過程を、年表などでとらえさせ、世界の動きと関連付けて問う問題である。

問3は、平成13年度中学校教育課程実施状況調査との比較問題である。全国の正答率よりも高く、重要事項の定着が図られている。問4と問5も、正答率は高いが、無解答や似た記述による誤答が目立つことから、基礎的・基本的な事項の正確な知識・理解が十分ではないことが分かる。

そこで、指導に当たっては、幕末から明治時代にかけてのできごとを年表にまとめる作業をさせたり、人物ごとに関連事項を整理させたりすることが必要である。その中で、小テストなども取り入れながら、定着を図ることが大切である。重要語句や人物名を漢字で正確に書かせる指導も繰り返し行うことが大切である。

